絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践
～花束をみんなで作ろう～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
和田樹奈・松藤那未・豊福琴音・清永紗彩
野中唯・有田茉央・中村珠乃
桑野綾夏・北島はな・髙月凜
縄田倫音・成松月海・森美百羽

1. 実践の概要

題材とした絵本：『きょうはなんのひ？』
文：瀬田 貞二
絵：林 明子
出版：福音館書店（第79刷）

実践のタイトル：「花束を皆でつくろう」

実践準備の担当：総合責任者（和田樹奈・松藤那未）、脚本（北島はな・桑野綾夏）、ドア作り（野中唯・有田茉央・清永紗彩）、花束の台紙（中村珠乃・髙月凜・豊福琴音・北島はな）、音楽（森美百羽）、ゼント（豊福琴音・有田茉央）、カゴ作り（和田樹奈・松藤那未）

実践時の担当：父親（松藤那未）、姉（野中唯）、妹（和田樹奈）、友達（北島はな・桑野綾夏・髙月凜・縄田倫音・有田茉央・成松月海・清永紗彩・中村珠乃）、映像(豊福琴音)音・演奏（森美百羽）

2. 題材について

『きょうはなんのひ？』という絵本を題材とした。

この絵本は、結婚記念日の両親に対し主人公がサプライズをするという物語となっている。

主人公から母親に手紙が渡され、その手紙には「ケーキの箱を見る」と書いてあり、見てみるともう1枚手紙が出てくる流れになっている。

手紙1枚ごとに次の手紙を見つけるヒントが書かれており、母親が次々見つけていく場面が書かれている。

さらに、手紙を順番に見つけて行くと最後に素敵なゼントがあるという物語だが、ゼントの他に全ての手紙の頭文字を繋げると結婚記念日おめでとうという文字が出来上がるというサプライズが施されていた。このサプライズを受け主人公の両親がとても喜んでいる場面で物語が幕を閉じた。

絵本の題名がきょうはなんのひ？となっており、結婚記念日を忘れていた両親に対し子どもがサプライズをすることで両親が感動するという情景も細かく書かれている。当初劇の中

で物を作りたいと考えていた私たちは、物づくりの場面が出てくる絵本を探していたが物を作るという題材では子どもとの関わりが難しいと考え、上記の絵本の主人公が両親にサプライズをする、両親の結婚記念日を祝う、という場面に目をつけた。

手紙を1枚ずつ開けて行くと最後にひとつの言葉になると言う宝探しのようでもあるユニークなサプライズ方法が展開されている点からも遊びのアイディアが出やすいと考えこの本を選んだ。

（執筆者：中村珠乃）

3.絵本の世界から遊びへの展開

選択した絵本の中から展開できる遊びのアイディアが3つ出た。

1つ目は、主人公がママに手紙を渡し、その手紙の内容を追っていくことで両親の結婚記念日を祝うゼントに辿り着く場面から展開できる遊びとして、いくつかの手紙を用意し子どもたちに解読を手伝ってもらい一緒に隠されたゼントを見つけるという案が出た。

2つ目に、主人公が両親の結婚記念日を祝うという場面から、ステージ上でケーキを作る学生が子どもたちに大きな声で作り方を教えてもらい子どもたちと一緒に大きなケーキを制作するという案が出た。

最後に、主人公が両親の結婚記念日を祝いサプライズでゼントをあげるという場面から、両親にサプライズとして子どもたちにお花を作ってもらい、その花を学生がステージ上で大きな花束にするという案が今回採用された。

3つの案から選択する際の過程として、子どもたちが楽しんで参加出来るかどうかを一番に重視し、子どもたちが声を出すだけでなく実際に作品を作ることの出来る案を選択した。また、少人数の子どもだけでなく会場に来た子ども全員と関わることができるようみんなで花束を作るという案を選択した。その他の配慮として、絵本の作中では両親に向けた結婚記念日のサプライズとなっていたが様々な状況を考慮し、ママへの誕生日ゼントとして花束を作ることに決めた。

（執筆者：縄田倫音）

4.実践に際して大切にしたこと

実践に際して大切にした事は、花束の花を作る時にどのようにしたら子どもたちの想像力を広げることができるかということと、子どもたち自身がこの物語の中に入り込めるようにするためにはどのような工夫をしたら良いのかということだ。

花束の花を作るにあたって、子どもたちがどのようにしたら自由に作れるか大切にした。最初は私達が予め蛇腹に折ったものを広げてもらうというだけだったが、それでは子どもたちが、やらされているという感じが強くなり主体性がないと感じた。そのため違う色を5枚1組にし、その5枚で子どもたちが自由に発想を広げられるようにした。5枚違う色にすることでぐしゃぐしゃと丸めるだけでも綺麗に見えたり、発想によっては1組で何個も花を作ることができる。また、輪ゴムが欲しい子には輪ゴムを渡して、真ん中を止めて広げて花にすることもできるようにした。本番では出来上がった花を子どもたちに実際に舞台に上がってもらって花を貼ってもらうことで、花束を自分たちの手で完成させていくという喜びや、楽しいという気持ちを味わう事ができたのでは無いかと感じた。子どもたちが自由に花の形を作れるようにしたため、様々な形をした花が集まって、想像以上に大きく、綺麗な花束になった。

この劇はママへの誕生日にみんなでゼントを作るという物語だが、ママが１度も出てこない。子どもたちがこの物語に出てくる"ママ"を自分のママに当てはめて想像できるように、ママを登場させないことにした。

(執筆者：成松月海)

5.実践内容について

（1） 全体の構成

パパがケーキを取りに行っている間に姉妹がお友達と一緒にママの好きな花束を誕生日にプレゼントしようとするお話。

ママの誕生日プレゼントにあげる花束を見にきてくれた子ども達と作る。見にきてくれていた子どもたちに舞台に上がってもらって自分たちでもお花を貼ってもらう。

パパがお姉ちゃんと、妹に「今日何の日でしょう」と言うと妹とお姉ちゃんは「ママの誕生日」と答える。

すると友達は「えっそうなの」と言ってパパはママの誕生日ケーキをお店に取りに行く。妹とお姉ちゃんは「わかったいいよー」と言ってパパが出て行くとお友達が「ママの誕生日何用意したの？」と聞く。

すると妹はまだ用意してないことに気づきお友達が「どうするの」と聞くとお姉ちゃんが「ママはお花が好きだから花束を作ろう」と言う。

そしてお姉ちゃんはみんな手伝ってくれるって言って舞台上にいるお友達は「いいよ」と言う。

妹は「この前お花屋さんごっこしたやつ使おうよ」と言って舞台裏からお姉ちゃんと一緒に花束の土台を持ってくる。

すると舞台上のお友達はリアクションをする。

お姉ちゃんは、でも花がないと言い舞台上のお友達は「どうするの？」と言って、お友達がお花屋さんごっこのやつすごく大きいよと言うとお姉ちゃんは「私たちだけじゃ終わらないからここにいるたくさんのお友達に手伝ってもらおう」といい観客のみんなに手伝ってもらう。

姉妹はありがとうと言い、舞台上のお友達は机の上に置いてあったポシェットをかけて中に入っている花紙を配りに客席に降りていく。

すると客席から他のお友達が「手伝うよー」といって出てくる。花紙を渡して、客席のお友達にどんなのを作ろうかという声掛けをして、声掛けをして、戸惑っている子どもには事前に作っておいたお花の見本を見せて、「こんなのはどうかなー？」と提案する。

妹とお姉ちゃんは舞台上にいて子どもたちを見守る。

私たちお友達役は作り方があまりわからない子や戸惑っている子のサポートをする。

また、輪ゴムをポシェットの中に入れておき、蛇腹折りにして作る花などができるように工夫をした。

出来た人からお友達が持っているカゴに入れてもらうか、舞台上に上がって一緒に花束の土台に花をくっつけてもらう。

その間はピアノを弾いて子ども達が楽しくなるような工夫をする。
作った花を貼る際に子どもたちにどこに貼りたいか聞いて子どもの意見を尊重して花束を作っていく。
お姉ちゃんと妹が舞台上で花束を完成させていく。
完成したら友達役の人を舞台上に呼んで、完成したら花束を客席の人に見せる。パパが帰ってきて「これどうしたの？」と言うと、妹とお姉ちゃんは「ママへのプレゼント」と言い、友達が「花束」と言う。

妹が「パパがリボンつけてよー」と言ってパパにリボンを渡す。
パパは「分かったじゃあパパがこの大きなリボンをつけるね」と言って最終仕上げとしてリボンを花束につける。
ママを喜ばせるためにみんなでハッピーバースデーの歌を練習する。
パパが「そろそろママが帰ってくるからみんなで外でお出迎えしようか」と言って玄関からみんなで出ていく。出ていく時に妹がこうしたらママ喜ぶかもと言って提案したことにみんなで賛成して出る。
そして扉の向こう観客席から見えないところで「ママおかえりー」と言った後に「ママお誕生日おめでとー」と言ってパパと姉妹が扉から顔を出して「サプライズ大成功」と言ってバイバイして幕が下がってきた時にハッピーバースデーの曲をピアノが演奏して終わる。

（執筆者：桑野綾夏・北島はな）

（2） 子どもたちとの対話について

ママにあげるための花束を会場にいる子どもたちにも一緒に作ってもらうために、劇の会話の中で「手伝ってくれる人いないかな」と言って会場の子どもたちが「いいよ」と言ってくれるように促した。急に理由もなく手伝って欲しいと言われても子どもたちも困るので、子どもたちが自ら手伝ってあげたいと思ってくれるように、劇の中で何も準備していないのにもうすぐママが帰ってくるのに花が間に合わないという設定にした。
そして、実際に紙で花を作ってもらっている時に、一人一人が会場の子どもたちに「どんな花にする？」「綺麗だね」「こんな作り方もあるよ」などたくさん話しかけてコミュニケーションをとるようにした。
そのおかげで花の作り方がわからない子どもも色んな作り方を知って自分のしたい作り方で作ることができていた。子どもたちが作ってくれたお花はチームの私たちが受け取って自分たちで紙に貼る予定を立てていたけど、子どもたちが自分で付けたいと言うので急遽変更して、「いいね！一緒に貼りに行こうか」と声掛けして、自分で貼りたいと言う子どもたちと一緒にステージに上がり自分で自分の作った花を付けてもらうようにした。その方が子どもたちも嬉しいだろうなと見ていて思った。

（執筆者：髙月凜）

（3）演出の工夫

部屋の設定として子ども部屋をイメージしたかったため、窓やカーテン、ソファー、カーペットの絵を描いてスクリーンに映した。また、テーブルを置き、部屋にいる人たちはスリッパを履いて子ども部屋をより一層想像しやすいように工夫した。劇の中でパパがママの誕生日ケーキを取りに行くシーンがあったため、ドアを使って部屋と外の区別をつけた。中幕を使うことでドアから外に出てからの動きが見えないように工夫した。花を集めるためのカゴはたくさんの花が入るように大きく作り、中の袋を半透明にすることで花が入っていることや花の色が分かるように工夫した。

演出として、ぬいぐるみを使ってごっこ遊びをしたりじゃんけんを行って実際に遊んでいる様子を見せた。パパが外へ出かけた後、花束を作るために友達とお姉ちゃん役と妹役がどうやって花束を作るのか考えるセリフを多く取り入れた。お姉ちゃん役が「でも花がない」と言い、子どもたちが花どうするんだろう、手伝いたいと思うようなセリフにした。花を台紙に貼るシーンは元々子どもたちが作った花を友達役がカゴに入れてお姉ちゃん役と妹役の2人が貼る予定だったが、本番では子どもたちが舞台に上がり自分が貼りたいところに花を貼っている姿が見られた。

ケーキと花束の用意が終わった後、ママを驚かせるためにハッピーバースデーの歌を歌おうと子どもたちに声をかけ、一緒にハッピーバースデーの歌を歌った。サプライズをするために友達役とお姉ちゃん役、妹役、パパが外へ出てドアの後ろから「ママー！おかえり」、「ママお誕生日おめでとう」と言い、ママとのやり取りを想像することができるように工夫した。元々では、花の作り方を教えたり花を子どもたちに隠して花束を作っていた。しかし、子どもたちが思う花束を作り、舞台に上がって好きなところに貼ることで一緒に大きな物を作った達成感と満足感を味わうことができるのではないかと思った。

（執筆者：松藤那未）

（5）言葉とセリフ

今回の劇のテーマが家族でサプライズをするという話だったので方言を取り入れたりして、日常会話のような感じでセリフを取り入れたりした。
お姉ちゃん役をして、セリフが多くて練習の時に語尾がおかしくなる部分があり、先生やメンバーに相談したが、子どもたちに伝わったり声を大きく出したりすれば良いという意見も出たり、方言や訛りがあってこそ日常の家族みたいな雰囲気を出せているというアドバイスを貰った。

また、花束を作っている時に黙々と作るのではなくてお互いの花束を見せあったり貼る位置をアドリブとして取り入れたりもした。練習の時などで、自分ではゆっくりめにセリフを言っていると思ったが、聞いてる側にとっては早口にセリフを言っているように聞こえていたので、本番では緊張もあったがゆっくり言うように心がけた。花束を模造紙に貼る時に子どもたちがステージ上に上がって行き、その際にも「どこの位置に貼りたい？」などと声を掛けた。

動きや言葉を考えて子どもの反応を予測して、大体こんな反応をするだろうというのを立ててセリフなどを考えて見直しておかしいと思う所を訂正しながら練習に取り組んだ。本番で「できた子からカゴを持ってるお友達に渡してね」というセリフを言わなければならなかったが、花束を貼るのに集中していてそのセリフが飛んでしまってお友達役の方達が上手くセリフを繋げてくれたので良かった。ゲネプロの時に相手が来てくれた子どもたちではなくて1年生などが相手だったので自分の言葉にどのようにして返してくれるのか不安だったが後ろの方から反応が良くて緊張が解けた。映像などをメンバーで見て自分の声はきちんと

出せているのか心配したが、音声を拾うマイクが後ろの方にあってそこまできちんと声も届いて自分のセリフも飛んでなくて良かったと思った。今回1番難しかったことは子どもたちにお花の紙を配って作っている間のセリフ繋ぎが特に難しかったなと感じた。最後のシーンで、ドアから妹とパパとお姉ちゃんで顔を出すシーンがあってサプライズ大成功というセリフで3人で声を揃えて言うので練習で中々揃わなくて一、二の合図でそのセリフを言わなければならなかったがそれぞれのタイミングがずれてそこも苦戦をしてたが本番ではきちんと最後のセリフも成功したので良かった。

（執筆者：野中 唯）

（6）造形について

まず、花束を作ろうとした時に、その花をどうやって作ってもらうのかについて考えた。最初はジャバラ折りにした花紙を7枚1組にして輪ゴムで閉じ、それを子ども達に配って開いてもらい、開いてもらった花紙を台紙に貼るという案だった。その方が作り方を教えやすいし、何を作ったらいいのか分からない子どもにも分かりやすくて良いのではないかと思った。実際にでジャバラ折りにした花紙を子ども達に渡したところ、きちんと開いている子ども、輪ゴムを取って分解しようもする子ども、くしゃくしゃに丸める子どもなど様々な反応が見られた。を踏まえて、花の作り方を1つに絞るのではなく、何枚かセットで渡して、そこから子ども達が作りたい作り方でしてもらい、作り方が分からない子どもに対して学生が案を出すやり方に変えた。本番では、様々な花が集まり、色んな種類の花の花束が出来た。

花カゴはみんなが作った花を集める際にただ集めて持っていくのではなく、花を花カゴに入れることで花を摘んだような雰囲気になれるのではないかと思い、制作した。強度があり加工のしやすさを考え、厚紙を使用し、実際の花カゴのようになるように網目状にした。少しでも子ども達が楽しい気持ちになってくれたらいいなと思い、このようにした。

玄関のドアでは、家の雰囲気が伝わりやすいように実際に出入りが出来るよう開閉式にした。少しでも実際の家にあるような物があった方が子ども達もステージ上が家だと認識しやすいのでは無いかと思った。また、ドアから出ていった後もきちんと閉められるように裏側にも取っ手を付けた。上の空白部分も変に空かないように画用紙を貼った。実際のドアに見えるようにドアの色も2色の茶色を使った。

ケーキの箱は遠くからでも見えやすいように赤い画用紙を貼った。また、みんなで話し合った時にゼント=赤色という印象もあったため、赤色を選んだ。しかし、それだけではただの赤い箱で、あまりゼントするようには見えないため、自分達で作ったリボンを付けることでゼントのような箱に見えるように工夫した。リボン

は立体感を出すためにただリボン結びをするだけでなく、お花の形になるようにした。

（執筆者：豊福 琴音）

（7）音と音楽

幼教こども劇場の中で、花束を作っている最中のBGMと最後に皆でハッピーバースデーを歌う場面、幕が降りる場面でピアノを使って音を使用した。花束を作っている最中は、「ちょうちょう」「チューリップ」「おはながわらった」「にじ」の4曲を花束が作り終わるまで繰り返し弾いていた。「ちょうちょう」「チューリップ」「おはながわらった」は、花束から連想されやすいお花や生き物が題名になっていたり歌詞の中に含まれているものを選んだ。「にじ」は、メロディや歌詞も柔らかくて明るい曲になっているため子ども達や幼教こども劇場を見に来てくれている人にリラックスして見て貰えるように選んだ。

この4曲を弾くにあたって、ピアノの音の大きさやスピードを工夫した。花束を作っている時にピアノの音が大きすぎると、ピアノの方に意識がいってしまったり騒がしく感じて活動の邪魔になったりすると感じた。そうならないためにも、なるべく優しいタッチで音を小さめに弾き、花束作りに集中して貰えるように意識した。また、スピードも早く弾いてしまうと子ども達にも感電して早く作らないといけないという雰囲気を作ってしまうと感じた。なので、普段よりもゆっくりゆっくり弾くことを意識した。

花束作りに参加しない学生や先生達にも、保健室でオルゴールが鳴っているような会場の中の時間がゆっくり流れているようなそんな感覚になって貰えたらいいなと思いながら弾いていた。

反対に、ハッピーバースデーを歌う時の伴奏や幕が降りる時には子ども達が歌いやすいように、会場全体にピアノの音が届きやすいように弾くことを意識した。花束作りの時よりも、音を大きめに弾いたりゆっくりではなく歌いやすいスピードで皆に合わせながら弾くことを工夫した。

（執筆者：森美百羽）

（8）　幼教こども劇場における子どもの姿と省察

幼教こども劇場を実践して、花束を完成させることに集中しすぎていたので子どもの言葉をもっと拾うべきだと感じた。

導入の部分では、花紙を見せて「花紙でどうやってお花を作れるかな～？」と問いかけたが子どもが考える時間を充分に取る事が出来ず、反応を見ることが出来なかった。導入の部分で子どもたちと対話を行える時間が少なかったと感じた。そのため、花を作ろうとする気持ちが起きなかったりぬるっとした始まり方になっていた。子どもたちが「作りたい！」と思えるような導入を考えることが必要だと改めて感じた。

主活動の部分では、花の作り方を教えるために急に人が増え子どもが混乱してしまう場面もあったように見えた。なので、一人ひとりの役割を明確にさせ、物語を作らないといけないと感じた。花を作っている時は、花紙自体で花束を作ると思っている子

どもたちが多かったので、初めから花束の台紙を見せておいた方がいいことがわかった。できなくて途中で投げ出してしまう子やきれいな花を作ろうと集中している子どももいた。作り終えた花を見て、「見て、可愛いのができた！」などと言って見せに来てくれたり渡しに来てくれたりした。花束を完成させている間の待ち時間が長く、少し退屈そうにしている子どもの様子があった。その中で、花に関することを話してくれたり花に関係する歌を歌っている子どももいたので待ち時間で歌いながら待てるようにピアノで演奏してBGMが必要だと思った。

最後に完成した花束を見せる場面では、完成した物を見せたので少し反応が薄いように感じた。なので、達成感を感じてもらうためにも花束ができていく過程を見せながら台紙に貼っていったほうが良いと思った。また、時間次第ではあるが子どもたちに貼ってもらうのも達成感を感じられるのではないかと思った。花紙を使い、花を作る姿を見ることができたのでの様子を活かして本番に繋げることが出来た。

（執筆者：和田樹奈）

（9）取り組む過程での改善と工夫

当初の計画として、がママの為に用意したお誕生日のための手紙を姉妹が見つけた後、姉妹がママの誕生日に気づき、花束を渡す為に子どもたちにも花作りを手伝ってもらいながら子ども達と対話的活動を行う計画だった。

しかし、それでは子ども達に強制的に花作りをするように促してしまっているようになってしまう為、子ども達が自ら花を作りたいと思う事が出来るような物語を作るために、先生やグループ全員で話し合いを行い、何度も物語の見直しを行った。

また、それを通していくつかの課題が出た。

まず子ども達に花紙を使って花をつくってもらう際に、1人で黙々と作る子どもや作り方が分からず困惑している子ども、花紙を捲ることに苦戦している子どもが出てしまった。そのため、決まった花の形ではなく子ども達が作りたい花の形に作ってもらうよう改善し、誰でも簡単に花作りを行えるよう工夫した。

その他にも、完成した花を色紙に貼る際は、子ども達に見えない場所で貼ってしまっており子ども達と完成していく喜びを感じることが出来ていなかったため、本番では子ども達が見える場所で花を貼りながら、自分の手で花を貼りたいという子どもには実際に自分たちの手で色紙に花を貼ってもらったりと子ども達と一緒に楽しむことが出来るよう工夫した。

さらに、導入の部分がしっかりと決まっておらず始まり方がぐだぐだだったので、導入として姉妹がお友達と遊んでいる場面やがお誕生日のためのケーキを買いに行く場面などを追加し場面の切り替えを分かりやすくした。また、最後にハッピーバースデーの歌を歌ったりする事でお祝いするムードを高める事ができるよう工夫した。

（執筆者:有田茉央）

（10）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

本番での子ども達の様子は、問いかけに対して子どもたちは元気よく言葉を返してくれていた。舞台に花束の土台が出てきた時はとても驚いていて今から何をするのかワクワクしているように見えた。花を一緒に作ると伝えた際は、花を作るんだと驚き嬉しそうだった。

花を作る活動では子ども一人ひとりが主体的に活動出来ていたと思う。子どもたちは子ども役が見せた見本を見て「これ作りたい」や自分の好きなように花を作ってねと伝えていたので花紙をもらってすぐにぐしゃぐしゃに丸めたり、半分に破ったりと作っており自由な作品が沢山出来ていた。

　できた花を持って帰りたいという子どももいて、自分で作ったものには達成感が出る為、花を自分のものにしたい気持ちがあったのかなと思った。花をステージ上に持っていきたい子どもが数名いたため、生徒と一緒に上り下りをしていたがステージ上に連れていき生徒が先に下へおりてしまい、ステージ上の生徒と子どもの数が大きく違い、子どもたちが1人で降りている状況もあったので反省。自分と一緒に上った子どもと一緒に下がるか時間や人数などを決めて集まったら一緒に上り下りするなどの工夫が必要だったと感じた。

花を作る時はとてもワクワクして楽しそうに作っていたのでよかった。花束の完成を見た際は、自分たちで作った綺麗な花束にとても驚いてる様子が見られた。

（執筆者：清永紗彩）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【森美百羽】

　今回の幼教こども劇場を通して、大きい会場で子どもにも参加してもらえる活動を考える事、実際に行動に移していくことの大変さを強く感じた。どのように活動に参加してもらうのか、何を準備するのか、どのように物語を進めていくのか、を通しての改善点をどのように取りえれるのか等、様々な事を想像して対策しておくことの大切さを学んだ。
準備の段階で、お花をどうやって作ってもらうかとても悩んだ。お花の形を定めず自由に作ってもらう事でどんな花束が出来るのか想像が出来ず不安があった。

　当日、ピアノを弾きながらお花を作っている子ども達を見てみるととても真剣に作ってくれているなと感じた。人数が少なかった分、自分でステージに上がり頑張って作ったお花を貼りに行けたことでより一緒に花束を作ったという感覚を味わってもらうことが出来たのではないかと思った。子どもと一緒に作業をする事がメインの活動だったので他のグループと比べて声掛け等がほとんどない分盛り上がりは少なかったなと感じたが、とても綺麗な花束が出来て子ども達にも楽しんでもらえている姿が見られたので良かったと思った。

【成松月海】

　こども劇場を通して、私達の声かけや準備次第で子どもの行動や想像力が変わるということと、グループで協力することの大切さを学ぶことができた。
劇の中でどのような声かけにしたら子ども達が答えやすいか、分かりやすいかをグループのみんなで練習で実践しながら、意見を出し合いながら工夫することができた。また、花束の花を子どもたちがどのようにしたら自分が好きな形の花を作れるかどうかを考えることができた。子ども達それぞれが自由な形を作るにあたって、どのように作るかわからなくなる子

どもや、すぐには思いつかない子どもがいることも考え、こんな感じもできるよ、とお手本の花を持って歩くなどの工夫もした。
　私たちがやって欲しいと思ったことでも、子どもが主体になって積極的にやってみたいと思えたり、楽しいと思えるように、日頃から子どもたちの想像力を狭めないような声かけや準備を意識することが大切だと感じた。

【縄田倫音】
　今回の幼教こども劇場を通して、子どもに対し指示をしてやらせるのではなく子どもの主体性を大切にし、子どもたちが自由に活動できる環境を守ることが大切だと学んだ。
　特に、 子ども一人一人にお花を作ってもらう場面については、お花の作り方をこちら側が決めてしまうことによって子どもたちが作りたいお花ではなく作らされるお花になってしまうと考えた。そのため、花紙を予め蛇腹にして渡す予定から花紙をそのまま渡し、子どもたちの思うがままのお花を作ってもらうという進め方に変更した。
　すると本番では、紙を丸めてお花にする子どもや輪ゴムを使ってお花を作る子どもなど自由にお花を作り楽しんでいる子どもの姿を見ることが出来た。
　さらに、全てを台本通りに終わらせるのではなく子どもたちの様子に合わせて臨機応変に対応することの大切さも学べた。
　特に今回の幼教こども劇場の本番では、準備段階で想定した子どもの人数よりも少人数となり当初1人1つ作る予定だったお花を1人でいくつも作ってもらい、作ってもらったお花を学生が回収し貼っていく予定から、子どもたちに実際にステージに上がってもらい自らお花を貼ってもらう等予定を変更したところがいくつかあったが想定よりも子どもたちが楽しんでくれたため、こちらが実際の時間、人数等を踏まえ臨機応変に対応することで子どもたちにとってより充実した時間になることを学んだ。

【髙月凜】
　今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは子どもたちが自分でやりたいと思ったことをすることの楽しさである。
準備の過程で私たちは最初､花束を作るのに会場の子どもたちに無理矢理手伝ってもらうような設定にしてしまっていた。でもこちら側の目的のために無理矢理手伝っても子どもたちは楽しくないだろうと考え、子どもたちが手伝いたくなるような声掛けをすることを意識した。
　そして、最後自分たちで作ったお花を私たちが紙に付けて完成という設定にしていたけれど、本番予想もしていなかったけど子どもたちが付けに行くと言うので､それもありだなと思い、みんなで臨機応変に自分でつけに行きたい子どもたちはステージに上がってもらって付けてもらうように変更した。
　その花を自分で付けている子どもたちの顔を見ていたらとても楽しそうで私たちもとても嬉しくなった。
　花束が完成した時も会場の子どもたちはみんな笑顔だったので自分で最後まで作った方が嬉しいんだということを考えさせられた。
これからも子どもたちの自分でやりたいという気持ちを尊重し大事にしたいなと改めて思った。

【豊福琴音】
　幼教こども劇場を通して、保育はただ活動の機会を与えるのではなく、その中でも子どもの主体性を大事にすることの大切さを学んだ。準備の段階では、どうしたら子どもと対話的な活動になるのか、子ども達が自らやりたいと思ってもらうためにどのような声掛けを行うのかを考えることが大変だった。ステージ上から話しかけるだけでは上手く対話が出来ないのではないかと考え、子ども達が座っている客席におり、横に立って少人数で活動するよう

にした。そうすることで、恥ずかしくて遠くからは声をあげられない子どもでも、近くの学生に対して話せていたのでよかった。
　花束を作るとなった時も、どこまでを自分達で準備、制作し、どこから子ども達にしてもらうのかの線引きが難しく、やらせるのではなくやりたいと思ってもらえるようにたくさん考えた。花束の台紙やケーキの箱の制作を担当し、講堂は広いので遠くからでも見えるような大きさや色を使うように工夫した。一つひとつ細かな所までどうしたら子ども達が楽しんでくれるのかを考えるのは大変だったけど、どのような反応が返ってくるのかを考えて、きちんと準備しておくことの大切さを実感した。
　本番で子ども達と花束を作ってみて、私が思っている以上に各々の花を作ったり、たくさん作って貼りにステージ上に上がってきたりする子どもが多かった。花の作り方を1つに絞るのではなく、好きなように作ることで様々な作り方で作りたくなりたくさん作ることに繋がったのではないかと考えた。
　この幼教こども劇場で学んだ子どもの様子を予測すること、それに合わせた準備をすることで本番で予定通りに進まなかったとしても、臨機応変に対応することが出来るのだと感じた。これから保育をする時に、子どもの気持ちや主体性を大切にし、きちんと計画、子どもの行動を予測、準備を細かく心掛けようと思った。

【和田樹奈】
　幼教こども劇場を通して、子どもが「やりたい！」と強く思って参加できるように工夫をするということが一番の学びになった。活動のメインになるのは子どもなのでどのような言葉かけを行ったら子どもたちの意欲が上がり楽しく参加してもらえるのかや、完成した後に達成感を味わってもらえるのかにこだわって発表をすることが出来た。
　準備の過程では、ママにサプライズをするという子どもにとって身近な物事を題材に、なにを子どもたちと作れば一緒に達成感を味わうことが出来るのかを考えた。手の器用さなどは個人差があるので、みんなが簡単に作ることができるものを一緒に作ったら良いのではないかと考え花紙を使い花束を作ることにした。花束の見え方や物語の構成など、物語性が強いものではなく自然に見えるように工夫をすることが出来た。
　では、役割がハッキリしていなかった分急に人が増えたり曖昧になっていたりしていた部分が多かったが、本番では一人ひとり役割がハッキリしていたので子どもたちの戸惑いもなく進めることが出来た。
　実践を通して、予想より子どもの人数が少なく反応がかえってくるか不安もあったが問いかけに対し「いいよ！」など返してくれたのでコミュニケーションをとることが出来た。花を台紙に貼ってもらう際にステージに上がってもらうことで、ステージ上でどんな花を作ったかなどの会話をすることができたのでより一層の達成感を感じられたのではないかと思った。みんなで大きな作品をひとつ作ることで達成感や満足感を味わえたのではないかと思う。事前に子どもの姿を予想しながら準備をすることでより良い作品になったと思う。また、直前に変えた部分もあったが臨機応変に対応することができ対応力も身についたと思う。この経験や身についた力を次でも活かせるようにしていきたい。

【野中唯】
　準備の段階で中々アイデアが思い浮かばなくてケーキを作るのなど何かを作るのということから始まってネットなどで色々調べたりした。しかし、いいものが見つからなくて少し焦っていた。
　けれど、絵本の内容を少しとり入れてママの誕生日に花束を作るという案が出てきて子どもたちに花束を作って貰って模造紙に貼るという内容で進めていて年長の子などは作れそうだが、年少の子が作れないかもという意見が出てきた。
　実際に大谷幼稚園で年少さんを対象に花束を作って見て蛇腹で折っている状態で渡して作り方が分からなかったりして困っている園児もいて難しいなと思った。道具などの作成の過

程では、玄関を作る工程で高さを測ったり小さい折り紙を用いて色の組み合わせを考えたりしてどのようにしたら玄関のドアがリアルになるのか工夫しながら造った。
　劇の準備やセリフ合わせでは、お姉ちゃん役をやりセリフをちゃんと覚えているが飛んだりしたことも多くあった。
　また、言葉とセリフのところでも書いてあるとおり最後の語尾がおかしかったりしたこともあった。その際にたくさんのアドバイスを受けてそれを元にして言うことに気をつけた。本番で子どもたちに尋ねる場面で、反応がなかったらどうしようと思っていたが、映像を見たら子どもたちはきちんと反応してることが分かって良かった。この経験を通してメンバーで何かを一から作り上げる言葉は難しいなと思った。先生方からたくさんのアドバイスをもらい特にドアを作る作業では自分達ではあまりいい案が思い浮かばなくて何度も相談してみたりしながら自分たちの納得のいくものが作れた。約3、4ヶ月の間でメンバーが色々と苦戦しながらピアノの演奏やステージの構成などを作り上げてこの期間でここまで作り上げられることが出来て良かった。終わったあとも同じクラスの子からおつかれ～や良かったよなどと言ってくれてホッとした感じもし、達成感も感じた。衣装なども幼い子どものような洋服を自分たちの家から集めてきてそれを共有したり、ぬいぐるみを持ってきて子ども部屋を演出もした。普段は生活では話さないメンバーと組んでお互いに言いづらいところもあったが、このメンバーで出来たのが良かった。子どもたちも自らステージ上に上がって来るとは考えてなくて何回も上がって来てくれた子もいて中には1年生もたくさん上がってきてくれてありがとうの気持ちでいっぱいだ。この授業で学んだ事は今後の新たな経験としていかせたらいいなと思った。

【松藤那未】
　今回の幼教こども劇場を通しての最大の学びは、グループのメンバーとコミュニケーションをとり情報共有を行うことの大切さについて学ぶことができた。
準備をする過程で、劇の流れを全員が把握できていなかったため、何を準備すればよいか分からない時があった。
　また、役割分担を行って作業を進めていたが、どこまで終わっているのか共有できていなかったこともあり、小道具を作るのに時間がかかった。そのため、手が空いている人に「手伝ってくれる？」とコミュニケーションをとることも大切だと思った。
　また、劇の練習でセリフを言う際にグループのみんなに「ここどんな風に言ったら伝わるかな？」と話し合いながら劇の練習を進めることができた。話し合いを行うことでみんなが一体となって劇の練習を行うことができた。一部の人だけが準備の状況や劇の流れを理解するのではなく、グループの全員で情報共有をすることが大切だと思った。
　そのため、保育の現場に出たらしっかりとコミュニケーションをとり情報共有を行うようにしたいと思った。

【清永紗彩】
　幼教こども劇場を通しての最大の学びは、子どもたちの行動、言動に対して臨機応変に対応することの大切さだ。
午後の部は小学生が多く、作りたい花の形が決まっており、「このお花作りたい」と伝えてくれ同時進行で一緒に作ったが、複数人と一緒に製作を行ったので「ここは」と戻る動きもあり、次に進んでいる子どもしか見ることができておらず、子どもたちを待たせてしまい反省した。
　また、保護者からの質問に対し上手く伝えることが出来なかった。ドアの製作では、存在感を出せるよう、全員が通れる大きさにして開閉できるようにした。扉が重さで開いてしまうので土台に両面テープを貼り扉が勝手に開かないよう工夫を行った。実際の活動では、作り方が決まっている花を作ってもらうのは作らせている感があるので、自由に作ってもらえるように見本を2種類ほど用意しておき、破ってもいいよ等声をかけることで子どもたちの

好きなように作ってもらおうと話し合いを行ない、本番に臨んだ。準備の時点で全員の情報の把握が難しかったが、最後まで質問や話し合いを行い、やり遂げることができたので良かったと思う。

【桑野綾夏】
　今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは子どもたちが主体的に活動する声かけの難しさと、1人で作ったら小さいものでもみんなの作品を合わせたら大きい一つの作品になる喜びを学んだ。
　子どもたちはとても素直でやってと言ったことを丁寧にしようとしてくれるけれど、自分の思いでやってみたいと思った時子どもたちは自分たちで考えて動いてくれた。声をかけに行った子どもたちは最初花紙を渡されてとても戸惑った。なので私がこんなのどうかなと声をかけるとそれと同じように作っている姿が見られた。1回目は戸惑っていたけれど、「もう一枚ください」と言ってきたあとは自分たちでどうやったらお花になるか考えながら自分たちが思うお花を自由に作っていた。みんなとても笑顔でお花を貼りに行く姿を見られた。なのでいきなりで戸惑っても慣れてくれば自分の思うことができるようになってくるのだと知った。なので私たちは子どもが本来の発想力を発揮できるような声かけや最初の一歩目をフォローできるような声かけが大切だと学んだ。

【北島はな】
　幼教こども劇場を通して、子どもたちの前で劇をすること、子どもたちが主体となり、子どもたちと一緒に劇を進めていくことがとても難しく感じた。
　何を目的として劇をするのかについて、グループで話し合っていく中で様々な意見が出た。自分たちだけが劇をするのではなく、子どもたちと一緒に劇を進める必要があった為、どこの場面で子どもたちも一緒に参加してもらうのか、参加方法について考えた。
　花束を作るという目的を作りを行った中で、花束を作ることを時間内に終わらせないとと思い、あまり子どもたちの声に耳を傾けることが出来ず、子どもたちが主体となってという1番大切なことができていなかった。
　での反省を踏まえ、本番に向け、子どもたちと一緒に花束を作っていく中で、子どもたちが楽しいと思えるような劇にする為に先生方の意見を聞きながら改めて脚本を考えた。
花束の花について、最初は蛇腹折りにし、輪ゴムを止めておいて色は違うが、全部が同じ形になるような花束にしようと考えた。しかし、を通し、子どもたちが好きなように、自由に花を作るということを考えた際に、蛇腹折りにし、輪ゴムで止めてしまうのはお花はこれといった決めつけになってしまう為、蛇腹折りにしたいという人には別で輪ゴムを渡し作ってもらう、他に作りたい花がある場合には自分の好きな花を作ってもらうようにした。
本番では、子どもたちが主体となって劇をすることができ、最初の予定にはなかった子どもたちが自分たちで作った花を舞台上にある土台に貼りに行って完成させるということも出来た。

【中村珠乃】
　今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは子どもの最善の利益を考える方法だ。今まで子どもの最善の利益というワードを授業中に、何度も聞いた。
　しかし、具体的なことはよくわかっていなかった。今回、幼教こども劇場でなにをするかとなった時に、クリスマスが近いからそれを題材にした何かをしたらどうかという案が出た。しかし、教員に色々な宗教の子どもがいるからやめた方がいいとアドバイスをいただいた。他にも、片親かもしれないからや、花の折り方を教えてしてもらう方法だったら手伝ってるよりやらされる感が出てしまうなど様々なアドバイスをいただいた。
　その経験から、そこまで考えないといけないのか、そういうところを気につけなくてはいけないのか、こうした方がいいのかなどの考え方が身についた。実践の際の子どもの反応

は、最初花紙を渡した際は少し戸惑いがあったものの、こんな風にできるよなどと声をかけると作ってくれたり、もっとちょうだいと言われたり、喜んでくれて嬉しかった。
また、花束の土台に自分で貼り付けできることも楽しんでいた。やはり、自分で好きなように作れるのは強制されるより倍楽しいのだなと実感した。

【有田茉央】
　今回のこども劇場を通して、グループで協力する事と情報共有を行うことの大切さを学ぶことができた。
　制作物を作ったり、台本を作っていく中で何度も改善を行ったが、改善する度にチーム内で改善した部分の情報を共有しておく事でトラブルを無くすことにつながったりグループ全体の課題などを見つけことが出来るのだと思った。
　また、では子どもたちに声掛けを行う際に、子ども達の返答や反応を待たずに次に進んでしまい子ども達が主体となった関わりを行うことができていなかった。
その他にも、花紙で作った花を色紙に貼る際に、子ども達に見えない所で花を貼ってしまったりしたため、子ども達と一緒に花束を完成させる事の楽しさを共有することが出来なかった。その為、この反省を活かし、本番では子ども達の様子に合わせた声掛けなどを行い、花を色紙に貼る際も実際に子ども達に見えるように貼ったり、お花関連の音楽を流すことで子ども達も楽しみながら花を作ることが出来ているように感じた。
この事を踏まえ、今まで私は子ども達の目線ではなく自分自身目線に立って子ども達と関わってしまっているんだと気づいた。この学びを活かし、私は子ども達の目線に立ち物事を考え、他の人と協力する事の大切さを忘れないよう今後に活かしていきたいと思った。